

南山短期大学人間関係研究センター事業報告

(1977年～1983年)

I 研究会

1. 「コンティンジェンシー理論について」 …… 野中郁次郎(一橋大学) …… 108
— 現状と課題 —
2. 「大学教育におけるTグループ適用の試み」 …… 星野 欣生(南山短大)
— 教育の変革を求めて — 山口 真人(南山短大) …… 109
3. 「これからのカウンセリングのあり方」 …… 小林 純一(上智大学) …… 111
4. 「わたしの歩んできた道」 …… 霜山 徳爾(上智大学) …… 113
5. 「ヒューマンスティック・エデュケーション …… グラバア俊子(南山短大) …… 116
の動向と自己成長への身体的アプローチ」
6. 「ブーバーと教育」—我と汝を中心にして— …… 真行寺 功(金沢大学) …… 118
7. 「With-nessということ」 …… 星野 欣生(南山短大) …… 120
— 教師・学生関係について —
8. 「関係の神学」 …… 奥村 一郎(聖母女学院)
短 大 …… 122
9. 「教育を考えなおす」 …… 伊東 博(横浜国立大学) …… 126
10. 「からだ・ことば」 …… 竹内 敏晴(宮城教育大学) …… 128

II 社会人研修

1. 人間関係基礎研修講座 …… 132
2. 人間関係専門研修講座 …… 134
3. 人間関係特定研修講座 …… 137
4. 社会人研修参加者統計 …… 140
5. 1984年度 社会人研修予定 …… 141

III 南山短期大学人間関係研究センター規程 …… 142

IV 南山短期大学人間関係研究センター研究員 …… 143

コンティンジェンシー理論について
— 現状と課題 —

■ 野中 郁次郎 (一橋大学教授)	昭和33年	早稲田大学政治経済学部政治学科卒業 富士電機製造(株)を経て、
	昭和47年	カルフォルニア大学(バークレー)経営大学院にて Ph.D. 取得
	現在	南山大学経営学部教授を経て一橋大学教授
	主要業績	『組織と市場』千倉書房, 昭和49年 J. ヘイグ, 『理論構築の方法』(共訳), 白桃書房, 昭和53年

- 配布資料 1. 「コンティンジェンシー理論について現状と課題」
2. 「高業績企業と低業績企業の組織 — 環境関係の比較分析」
3. 「行動科学的方法論の意義限界・方向」
4. 「人間関係論の再検討」

コンティンジェンシー理論について — 現状と課題

I 定義と展開

1. 条件適合理論

唯一最善の理論の否定と条件性の導入

2. 組織の環境(不確実性)適合理論

(1) 技術学派の台頭

サウス・エセックス研究, アストン研究

(2) 組織 — 環境関係の実証分析

有機的組織対機械的組織, ハーバード・プラグマチスト

II 構造

1. マクロ組織論(官僚制)の復活

2. 方法論的全体主義

(1) 個人, 集団レベルの人間関係論

(2) 組織レベルの組織構造論

3. 組織 — 環境関係の新機能主義

4. 中範囲理論としての操作性

III 課題

1. 組織の統合理論へのニーズ

2. 総合的コンティンジェンシー理論

環境, コンテキスト, 構造, 個人属性, 過程, 成果

3. 日本の経営組織の比較研究プロジェクト

大学教育におけるTグループ適用の試み

— 教育の変革を求めて —

■ 星野 欣生 JICE(立教大学キリスト教教育研究所)で、Tグループを中
(南山短期大学教授) 心に研究したあと、1974年から南山短大人間関係科に勤務

山口 真人 関西学院大学 佐々木薫教授のもとでグループ・ダイナミック
(南山短期大学助教授) スの研究を重ね、1975年から南山短大人間関係科に勤務

この研究会での発表内容は二つの部分にわかれる。一つは高等教育へTグループという非伝統的な学習方式を採り入れる背景や理念とその実際を概観したものであり、一つはその効果を実証的に分析しようとしたものである。前者を星野が、後者を山口が分担して報告した。

1. なぜ、南山短大人間関係科でTグループを必修の専門科目として採り入れているのか。

① 現代社会の多くの場面で、私達は、人間疎外や関係の稀薄化現象がひきおこされているのを目のあたりにしている。それは教育の場に於ても例外ではない。むしろ、“関係”がより強調されねばならない教育の場においてその傾向は増大化しているとも言える。人間中心の教育が主張されその実践が推進されねばならない時である。

② 南山短大人間関係科は、その目的の一つとして、人間の行動および人間関係のあり方と過程の理解と実際をあげている。人間関係について学ぶのでなく人間関係を学ぼうとし、そのために学習場面でラボラトリー方式を全面的にとり入れている。いつも、いまここにいる学生、教師が相互に学習の素材となりながら、学び実践していこうとしている。ラボラトリー方式の学習の基礎にあるとも言ってよいTグループが必修科目として採り入れられている所以である。

③ その根底にある考え方を学校教育との関連でとられるならば、i)「教える」のでなく「学ぶ」場としてのTグループ。ii)「関係の教育」としてのTグループ。iii)「反応の教育」としてのTグループ。iv)「集団に生きる教育」としてのTグループ。v)「ふれあい体験」の場としてのTグループ。の5つの柱があげられる。(それぞれについて、具体的な場面にもふれながら説明があった)。

2. 南山短大人間関係科でのTグループ合宿学習の概観（省略）

3. Tグループの効果とプロセスについての実証的分析

- ① 昭和51年9月25日から10月4日に行われた第2期生のTグループ合宿について、合宿前後になされた学生に対する質問紙による調査、全Tグループの逐語録などを中心に分析をすすめた。
- ② その結果を概観すると（ここでは報告された詳しい内容は省略する）。
 - i) Tグループ合宿は、大部分の学生によって有用であると支持され、特にコミュニケーション・スキルの向上と問題への取り組み態度の積極化が全体的効果として認められた。
 - ii) どちらかといえば、“自己に関する目標”の達成度が高かった。それらは、青年期特有の諸要素や、プログラム、トレーナーの影響などの要因によるものと考えられる。
 - iii) 変革（成長）への動機づけの強さは、個人目標の明確化の度合いに左右される。
 - iv) Tグループでの個人の成長過程を、発言内容の分析カテゴリーを用いて分析したが、「聴く姿勢」「自由な感情表出」「自由な自己開示」などの点で大きい成長への変化が見られた。これらは何れも発言率と発言の質をセッション毎に追いながら明確にしていっていったものである。そして、メンバーの相互作用分析が集中的集団体験におけるプロセスと結果とを総合的にとらえる重要な研究方法となることを示唆した。

4. 今後の展望

今後の問題点として、Tグループ体験の一般化と行動化、実施時期、スタッフの問題、研究の姿勢と方法などがあげられた。

（尚、詳細は南山短期大学紀要第7号に掲載されている）

（星野 欣生）



これからのカウンセリングのあり方

■ 小林 純一

(上智大学教授)

上智大学カウンセリング研究所長

著書：『不安と創造性』『マイクロ・ラボラトリー・トレーニングにおけるグループ・プロセスの研究』『カウンセリングと人間観』

カウンセリングという言葉は古くからあって、かなりポピュラーである。その内容は精神的に病んでいる人、具体的な問題を持つ人、例えば登校拒否やノイローゼ、障害を持った人やその家族といった特殊な人が対象となる相談、治療活動であると思われるのがほとんどであろう。しかし本来のカウンセリングはそうしたもののみではない。もちろん問題解決のための対話ということがねらいではあるが、結果よりもその過程を重視すること。問題を持つ人が自分の道を見い出していけるよう援助し、考えを一緒に進めていく姿勢がその本質となる。特殊な人のみが対象であるのではなく、人がその人生をいかに生き、子どもをどのように育てていくか、自らはどんな対人関係を持ち、どう老い、死んでいくのかを考え、その中で起こるすべての問題をとり扱っていくものである。すなわちカウンセリングはどんな人にも必要であり、一人一人の人が人生をより創造的に積極性を持って生きていくことができるように主として心理学的側面から援助する活動であると言える。また、歴史的には精神分析、行動主義理論などの流れの中でカウンセリングはより全体的な人間の成長変化を援助するためのものとして生まれ、発展してきたものである。従ってそれは単に心理学の分野のみでなく、哲学や宗教の分野のかかわるところでもあると言ってよい。

今、世界の情勢は常に不安定で、科学の発達とともにわれわれは公害問題に悩み、核兵器におびえ、一体いつ何が起こるかかわからない現代である。そんな中で人間は、人間としての幸せを作りだしていく必要がある。この時代にわれわれは一体何をし、どう生きるべきなのかということを考える人も増えてきている。この科学の発達とともに、人が人らしく生きぬくためにお互いの結びつきと相互理解、そして一人一人が成長していけるような社会を作っていくとするのが人間関係論の始まりではないだろうか。人間関係の勉強というのは他者とのつきあいを良くするための方法を習うのではなく、人間が人間として生

きるのはどういうことなのかを研究することである。

人間を考えるということは、目前にいる〇〇さんという人を考えることであり、「私」を考えることである。一般化した人間というものを考えるものではない。従ってカウンセリングの勉強は生きている個々の人間との対話や交わりについて深めていくことになる。すなわち、私という一人の人間と、他の〇〇さんという人間が各々自分なりの人生を創造的に生きていくとき、私はその人の役に立つし、相手の人は私にとって役に立ってくれる、そうしたことがカウンセリングの基本的な姿勢にもなる。専門家としてのカウンセラーはそうした基本を土台に、さらに専門的な勉強と訓練をつみ重ねていくのである。現代の社会ではこうした基礎の上に自分の専門領域を築いていき、ある人は会社の中で、また学校や病院、福祉施設の中で、この姿勢を持ってカウンセリングの仕事を進めている。これが現代のカウンセリングである。

カウンセリングというものが今の日本の中で1つの流行として終らせてしまわないために、現代の日本にとって何が必要か、何が日本人の特徴であり短所であるのかをよく把握したうえでカウンセリングの活動を位置づけ秩序づけていかねばならない。

(文責 木村 晴子)



わたしの歩んできた道

■ 霜山 徳爾

(上智大学教授)

1942年, 東京大学文学部卒業

現 在 上智大学教授 臨床心理学専攻

著 書 『人間とその影』(中央出版社), 『明日が信じられない』(光文社), 『人間の限界』(岩波書店)

訳 書 フランクル『夜と霧』(みすず書房), 同『死と愛』(同)
同『神経症』(同), ポス『東洋の英知と西欧の心理療法』
(同)

私が戦前心理学に入っていた頃は、まだ臨床心理学とか人間関係という言葉のなかった暗い時代だった。その動機は臨床的なことに魅かれていたことと、フロイトの影響を受けたこと。しかし、心理学に入って失望した。実験室的な心理学が主流だったからである。また医学部の神経科の講義に出たりして、臨床的なものにどうやって近づいたらいいか模索した。

しかし、戦争で三年間海軍におり、そこで、極限状態が人間にどんな作用をするかという、人間性のあらわな真実を見た。

戦後は臨床心理学の夜明けであるが、また大変な混乱の時代でもあった。飢餓が人間行動にどんな変化を与えるか、とか疎開児童の問題(学室内に強制収容所と同じボスが出来た)、そして体は子供なのに、顔は大人になってしまう戦災孤児の問題があった。それから東京医科歯科大の神経科の手伝いを、島崎敏樹教授の理解のもとに始めた。兵舎を転用したボロボロの校舎で、心理テストや心理療法をやった。私の苦闘時代であった。その頃は、まだ心理学をやる者は理解されなかったし、学会の中にも抵抗があった。向精神薬もまだなかった。しかしだんだんと臨床心理学者が出てくるようになり、カウンセリングや人間関係は、それよりももう少し遅れて出てきた。

そのうち上智大学へ移った。当時上智大には実験道具も本も研究室もなく、零から始めなければならなかった。

そしてドイツ政府留学生にさせていただいて、西ドイツのボン大学へ行った。ボンに行ったのは、そこにハンス・グルーレ(ハイデルベルグ学派の創始者、マックス・ウェーバーの影響を受けている。精神科の教授で文学部の教授)がいたから、かれはヤスパース流の厳密な方法論の上に立って、精神分析学などは一切認めなかった。その著書は簡潔明瞭であった。

一方、そのためかえって私は一層深層心理学的なものに魅かれ、分析の指導を受けたりもした。

留学をすると知識の獲得もさることながら、先生となる人の人間としての学徳を学ぶことが出来、それが留学の成果だと思う。カトリックの心理学者のジークフリート・ベーン先生やグルーレ先生がそうである。しかし、こういう偉大な精神医学者が今のドイツにも、世界にもいなくなったのは大変残念である。この頃は、人間的な幅とか教養とか、そういうものが小粒になってしまった。たとえばグルーレ先生のところでは、精神医学の他には、ギリシャの宗教の世界などについて教わった。当時はまだこうした偉大な精神医学者が存命であり、中にはたった一度しか会ったことのない人もあるが、そうした人に触れえたことを有難く思っている。このような人は格が違うと思う。

ところで私はやはり深層心理学に魅かれていたが、しかしフロイトの持っている一種の生物学主義みたいなものには抵抗があった。しかしその頃はいわゆる人間学派、あるいは現象学的精神病理学（たとえばゲープザッテル、ツット、クーレンキャンプ、ピンスワンガー）の興隆期であり、現存在分析などに新鮮な感じをもって接していき、これを紹介することになった。

その他、フォン・ヴァイツゼッカーやヤスパースもスペクトルの広い学者で学ぶところが多かった。フランクルともふとしたことで知りあって、フランクルのものを日本に紹介することになった。かれは理論家ではなく、臨床家として非常に有能な人で、色々のことを学んだ。

こうした大切な出会いをもって、私は日本に帰ってきた。日本はだんだん回復期に入っていて、私は上智大で教室を作り、医科歯科大へ行ったりしていた。そこでは優秀な精神病理の人たちがいて、一緒に輪読会や文献研究をやった。また労災病院の神経科で頭部外傷を受けた労働者の心理検査を三年間やったことは大変勉強になった。沖仲仕みたいな未組織労働者の人たちが、外傷自体はそれ程ではないのに、それを契機として始まるノイローゼで受診していた。また必ず一、二年で死の転帰をとる脊髄損傷を受けた人の側に付添っていて、死に臨んでいる人と、頭上を通り過ぎる飛行機に乗った自由な旅人とを比較して考えさせられるところが多かった。

臨床というのは多くの患者を診なければならないが、長くやっていると慢心が出る。いつもビギナーという、初心を忘れたら大変なことになる。どんなものでもたいがいわかっていると思うとそうではなく、絶対これでいいということはない。

その後、二度目の留学をして、その時はボイテンディクというオランダの医学者、心理学者、生理学者という幅の広い人から大分勉強させられた。この度は方々を渡り歩いて、一番長くいたのはスイスのチューリッヒで、ここでユングの研究所に行った。河合さんと行き違いに行ったことになる。ユングのやったことには色々の問題もあるが、しかしそのものの考え方には大変優れたものがある。またチューリッヒでメダルト・ボスとも知り合い、そのインド旅行を翻訳したので、インドにも三回ぐらい出かけた。そこでヒンズーの驚くべき英

知を学ぶことが出来た。

その他森田療法とか、内観療法とか、遊戯療法、行動療法など色んなものを勉強した。

ところで私は「各人は己の心理療法を持つ」と思っている。学派というものはない。結局、問われるのは我々自身のパーソナリティである。そうなる则自分の大変未熟な点を考えると、ペシミストにならざるをえない。これをどう解決するかということが問題である。

こうした時に大変役に立ったのはユングであって、かれは人生の午前ばかりに眼がいているのはおかしい、人生の午後に眼を向けるべきだと言っていて、人間の一生を生溘的に見る示唆を与えてくれた。つまり老人の問題である。老人性痴呆というも相当な部分は心因性であって、我々の働きかけによって、その状態から抜け出せると思っている。

それと分裂病者の社会復帰をやる時、ある職業についてサラリーが安いと非常に再発しやすい、厚くもてなすと再発しにくい、ということから経済学と精神病理学は会話をせねばならないのではないかと、精神病者にとって、お金は何を意味するのか、を考えている。

また学生などには、natura sanat「自然が癒す」という言葉を与えることにしている。今までやってきた中で自分が癒したものは一つもなく、全部自然がやってくれた。

自分の年ぐらいになって思うことは、大切なのは人間としての位どりの高さということであって、我々の接するのは結局運命にうたれたような人であり、そういう人に対して偏見を離れてみた方がいいのではないかとということ。平凡なことの中に非常に立派なものがたくさんある。また歴史を動かす無意識なものの暴力に対しての我々の無力さを感じるが、同時に多くの人の中にひそかに働いている人にいわない善意とか、歴史がそれについて一行も書かないような人の自己犠牲とか、そういう人の愛(カリタス)とか、そういうものを忘れないうようにしたい。人間嫌いにならないで、我々の接する世界は人間の裏の世界であって、そこで悪とは決して人間にとり不正ではなく、一つの不幸であると理解して受けとめる姿勢を保っていきたい。

(文責 大森 正樹)

ヒューマニスティック・エデュケーション
の動向と自己成長への身体的アプローチ

■ グラバア 藤岡 俊子
(南山短期大学講師)

1976～77年ボストン大学, ハーバード大学・ダンスセンター, Esalen Institute等で学ぶ。自己成長におけるからだの教育的役割を研修し, 現在はオイリュトミーに関心をもつ。南山短大でボディーワーク等を教えている。

[報告内容]

1.留学目的。2.留学日程。3.ボストン大学での体験を中心に, Humanistic Educationの動向と人間関係科で応用可能と思われる体験。4.Body knowledgeに関する様々な体験と幾つかの仮説および研究の方向性。

以下簡単に抄出する。

留学目的の一つは, 日本の教育制度の枠から自由になり教育観を拓けると言うことであった。実際にはボストン大学Humanistic and Behavioral Studiesの修士課程という米国の教育制度に籍を置きHumanistic Educationを学んだ。そこでの収穫と思われる点を三つ挙げる。

1)価値に関する教育への関心:二つの流れとしてマサチューセッツ大のSimonとKirschebaum等によるValues Clarificationとハーバード大のKohlbergによるMoral Developmentがある。前者の心理学的, 後者の哲学的というアプローチの違いはあるが, 後者もそれによる学習協同体作りの実験校を持つなど, 両者とも個人と共同体の成長における価値教育の重要性を示唆していると考えられる。

2)評価方法の多様性:この科では教科によってその内容に合った特徴ある評価方法が採られていた。例えば出欠の自己申告, 学習を援助し合うペアを作り, その相手による学習態度等に関する評価コメント提出, 完全な自己評価による評点, 評点により要求される課題の難易が異なり選択ができる等々, 日本の教育制度に慣れた者としては新しい眼を開かされる体験が数多くあった。それは単に評価がどう学習を援助し得るかという問題にとどまらず, 誰のためのそして何のための教育かという教育の根本に関する問いとして改めて考えさせられた。

3)Community Relations and Community Dynamicsへの参加:二週間のワークショップ方式の授業であったが, Tグループ・トレーニング形成期に関わったBenneに指導を受け当時の様子を聞くという機会に恵まれた。

授業は年令(16才から70代)・性別・職業・民族的背景・国籍の異った人々が集まり、相互の違いをまず明確に認識し、理解し、それを手がかりとして異分子の寄せ集めから共同体へと質の転換を計る試みであった。様々な集団に分解しつつ互いのコミュニケーションを欠く現代アメリカの抱える問題を見せつけられたと同時に、国際社会の一員として日本人にこそ必要な学習要素だと痛感させられた。第1目的に関連して、この機会も含め留学中の文化的背景・価値観の異なる五・六ヶ国の人々との交遊により自己理解の幅が拡がり教育観の根底にある人間観そのものに影響をうけたと考える。

目的の第二は、自分なりのBody Knowledgeの把握であった。それは、1)自己成長とは何か、2)自己成長にとってからだはどのような教育的意味を持つのかという二点を明らかにすることであった。1)に関してはMaslowを中心とする第三勢力と呼ばれる心理学を基礎に、Assagioliの提唱するPsycho Synthesisに示されるあるがままの自己の認識とその観照者としての自我、そして個別性と普遍性が調和されているより高次の自我の実現という方向性を再確認した。2)については、充分整理がついておらず次の三つの仮説をたててみた。1.ボディーイメージを通して自己像を明確にする。2.からだを動かすことにより、身体的カタルシスを行ない自己の筋肉の緊張に対すを気づきを高める。そして緊張が自己と対人関係に与える影響に対する感受性を高め、より豊かな表現者となる。3.からだの訓練により意識水準を高める。

(グラバア藤岡 俊子)



ブーバーと教育
— 我と汝を中心にして —

■ 真行寺 功

(金沢大学教授)

自閉症児の治療教育

主著：『精神薄弱児と普通児における視覚記憶検査の比較』，その他

訳書：V. フランクル『苦悩の存在論』

W. グラッサー『現実療法』

ブーバーの教育論の根底にはかれの「我と汝」の思想がある。ブーバーは人間関係の根本的なあり方を「我と汝」と表現するわけだが、この関係で重要なことは、個と個がまず別個に存在していてそれらが関係を結ぶのではなく、我と汝は最初から根源的な関係に結ばれて常に対をなして成立するという点である。「はじめに関係あり」とブーバーはいう。「我—汝」は“対語”をなす“根源語”といわれるが、それと対比的に根源的対語として「我—それ」が語られる。我—汝の我と、我—それの我は違うというわけである。我—それの我は、相手を対象化して認識する“経験”の主体である。その時対象は目的ではなく手段として我に利用される物と化している。かかる関係を彼は一概に否定するものではないが、人間関係はむしろ我—汝の我でなければならないという。この我—汝の関係は、人格と人格との関わりと言い換えることもできよう。(ここで人格というのは西洋思想の伝統の中で神の似像として理解されてきたペルソナの意味であり、パーソナリティの訳語としてのそれではない。人格概念についてはフランクル「人格についての十の命題」参照。)

我—汝関係の構造的特性として、①相互的であること。②直接的であること。③現在的であること。④全人的・全体的であること。⑤排他的・独占的であること、が挙げられる。このような特徴をもつ関係は“出会い”とも“対話”とも呼ばれる。出会いとは、我と汝とが向き合いながら、しかも互いにとらわれることなく開いた心で直接的な関係を結ぶ相互関係、つまりは人格と人格との相互関係を意味している。カウンセリングや臨床あるいは教育において出会いや対話の必要がいわれるが、この人格の意味を正しく捉えている人にとっては対話も出会いも難しいことではないと思う。ただここで注意すべきことは、我—汝の直接的な相互関係という時、よく誤解されるが、感情移入やある種の共感関係のように何らか相互に浸透しあう関わりとか、暖かい雰囲気の中での交わりのような関係とかをブーバーは考えていないということである。むしろ

彼の考えでは我―汝関係は、両者の“間”をなす“根源的な隔たり”においてこそ成り立つとされるのである。

以上のような我―汝関係をもとにブーバーが教育を考えると、 “包容” という独自の概念を用いる。それは先生と生徒の関係を対等で平等なものとするのではなく、先生から生徒への一方的な関係と見ることである。その意味で彼は、師匠と弟子のような徒弟制的な関係を本来の教育の形態とみなす。現代の教育は、学校教育にみられるように、意図的、合目的に教育ということ意識して、それを技術的に実現していこうとする。それに対し彼は、教育とは“無為の行為”であり、教育していないようで教育しているようなあり方、いわば「感化」的な教育が本来の教育のあり方であると考えている。では彼のめざす教育の目的は何かというと、それは「性格（人格）教育」Charaktererziehungである。すなわち我―汝関係を通して人格的統一体としての人間を完成させること（人格の完成）、彼自身の言葉では「偉大なキャラクター」を教育することが教育本来の目的である。偉大なキャラクターは、自分の行為や態度を通して自分のおかれた状況が要求してくるものに責任をもって応えてゆく、そしてそのことを通して自らの人格を完成してゆく。こうした性格教育の現場として彼が考えるのは「共同体」、ことにユダヤ人の民族・宗教的共同体である点はブーバー教育論の特異性である。この点からも、彼は伝統的な「教え込む」式の教育に反対するのはもちろん、その対極にある子供の自発性や自由を尊重する教育に対しても批判的である。

では性格教育において教師は何を求められるか。三つの条件があるという。①謙虚であること。②自覚と教育的責任をもっていること。③信頼をもっていること。この三条件は結局のところキリスト教という信望愛につながるように思われる。ボルノーが『希望の哲学』で言う如く、希望は人間関係の基本であり、それは未来に向かって開かれた態度でいることである。希望が出てくるのはその人への信頼がある時であり、更にそのような事が成立する根底には愛があるからである。

（文責 中野 清）

With-ness ということ

—教師・学生関係について—

■ 星野 欣生

(南山短期大学教授)

1979年8月から1年6ヶ月滞米，SIT（バーモント州）で、International Administration ProgramやNTLのTグループのトレーナー・トレーニングなどに参加。ラボラトリー教育を中心に研究をつづけている。

この研究会は私のアメリカへの留学報告もかねて行われた。S.I.T.でのInternational Career Training Programの体験学習アプローチやNTL(National Training Laboratory)でのラボラトリートレーニングでの体験を基に、特にスタッフと学生とのかかわりに焦点をあてながら発表した。

“With-ness”という言葉は、Jack R. Gibbが、グループ・トレーニングにおけるトレーナーのあり方を論じた折に使ったものである。彼はその論文の冒頭で、「私は、私がWith-nessにあるときに成長する。……」と述べている。私が滞米中に経験したラボラトリー方式の教育の中で出会った何人かのスタッフのあり方は、正に学生あるいはメンバーとWith-nessであり、そのことに触発されながら、教師としての自己のあり方を探ろうとした。

教育というのは、教える者と教えられる者との共同作業である。つまり、教師と学生との相互作用の働らきが教育成果の原動力であるということが出来る。そこに、教師が学生とどれ程withの関係にあるかということが問われることになる。ここで言うwithというのは、相互に相手を一箇の存在として認め受け容れられる関係である。その人との固有な関係づくりができることであり、その中で相互にそれぞれのもてるものを十分に相手に伝え、それぞれのもつとすることができることになる。

Jack R Gibbがあげている“withである”状態を参考にしながら、ここではWith-nessのための要素として7つ提示した。

(1) 人間性 (humanity)

役割としての教師から人間としての教師にどれ程脱皮できるかということである。でなければ、教師は教育機械になりかねない。その人らしさ、ユニークさ、独自性が自然に表われていることであり、そのためには自己概念が明確であることが必要である。

(2) 現実性 (reality)

いまをあるいはいまの生きざまをお互いにわからあえることである。相手を共存する関係の存在として受け容れていくことである。共感的態度が強く求められる。

(3) 相互関係性 (being interactive)

そこでは、相互に主体的に生きている状態でその交流関係が求められる。頼り頼られる関係である。対立をのりこえての相互依存関係が望まれる。

(4) 開放性 (openness)

相手に対して、心理的・物理的に開かれた状態にあることである。自からが開かれているとともに相手をも自由にする関係づくりが望まれる。

(5) 感受性 (sensitivity)

相手がいま、心理的にも肉体的にもどのような状態にあるかあるがままに感じとれることである。それは、いまここで起っていること (プロセス) にも関心をもつことから始まるといってもよい。

(6) 親密性 (intimacy)

心理的にも、肉体的にも相手の近くに存在することである。自由な感情の表出がそのからだの動きとともに大きな役割をもつ。

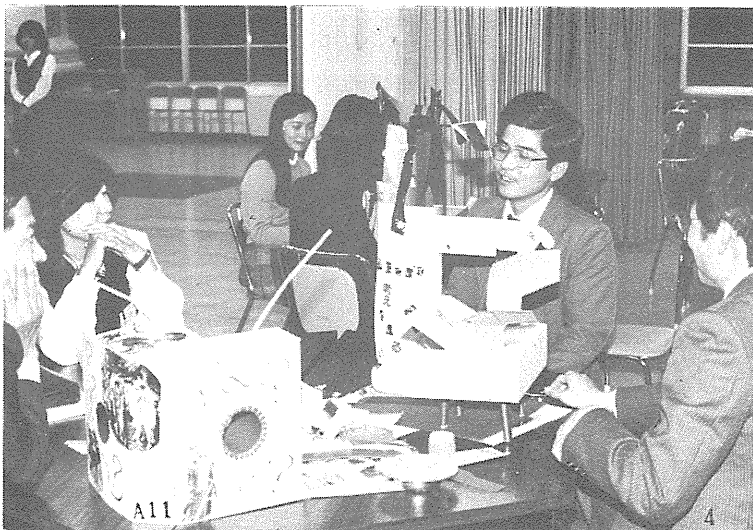
(7) 楽天性 (being optimistic)

状況を悲観的にとらえず、人間関係には問題発生が当たり前とする考え方、つまり問題解決的な思考、態度をとることである。安易に流れることなどないことは言うまでもない。

結論的に言えることは、自からが「ほんもの」 (authentic) であるとともに、相手をも「ほんもの」たらしめる関係づくりをすることにより “ Witness ” を達成することができるということである。

(尚、詳細は南山短期大学紀要第10号に掲載されている)

(星野 欣生)



関 係 の 神 学

■ 奥村 一郎

キリスト教と日本文化、日本語と神学、関係の神学。

(聖母女学院短期大学学長)

主著：『祈り』『主とともに』『祈りの底にあるもの』

「関係の神学 — 荷車 — 」

「関係の神学」という大きなテーマをいただきましたが、この大きな問題を短時間で述べ尽くすことは不可能なので、副題を「荷車」といたしまして、問題提起の形で仏教特に禅とキリスト教の考え方を対比させて、お話したいと思います。

「荷車の話」というのは実は、原田祖岳老師が書かれた本に載っているのです。昔、加藤という雲水さんが禾山老師について修行していた。或日、禾山老師を先頭に雲水等6名が京の町に托鉢に出た。ところが途中で、坂道にかかる時、重い荷物を山程積んだ荷車がその坂を登りかねていた。一人のおじいさんがその荷車を一生懸命引き悩んでいた。そこで雲水の加藤さんが、無意識に列から離れて、その車の後を押してやった。新訳聖書の「良きサマリア人」(ルカ10, 25～37)を实践した訳です。

ところがその時、禾山和尚は先頭にいたんですけど、ふっと気がついて後を見た、加藤さんが車の後を押してやっているのを見て、一言も言わず一人だけ帰ってしまった。そして帰るなり、侍者を通して、その加藤を下山させよと言ったということです。破門ということ、本人は勿論仲間も非常に心を痛めて、せめてその理由を聞かせて下さいと禾山老師に尋ねたところ、「修行者ともあろう者が、人の車に気を引かれるようでどうする。そのような無道師者は、そういう道を求める心のない者は修行する資格が無い。叩き出せ。」こう言われたそうです。

しかし、「ここで下山してしまっちは一生が御仕舞だ」加藤さんはそう思って、門宿といって、門の所で座禅をして一週間粘り通した。そこで、他の友達も、どうか許してやってほしいと懇願して、それなら独山だけは許してやると、ようやくお許が出た。その後、加藤さんは修行して、立派な禅僧になったというのです。

祖岳老師はこの話を書いて、「実に実に良い話ではないか。こう話していても涙が出るよ。師家も偉いが、修行者も偉い。」と感想を述べている。

ところで、花園大学の西村恵心先生がこの話をアメリカで、クエーカーの人達に話したのだそうです。ところが一人の例外もなく、この話を理解してくれない。困っている人を助けることこそが宗教家としてのとるべき正しい道であって、理由の如何にかかわらず、このことを咎められたり、罰せられたりすることは不可解であると反論したと言うのです。

このエピソードが私達に考えさせるのは、正しく、仏教、特に禅の靈性とキリスト教の靈性が正面衝突している、ということなのです。この体験を西村先生が鈴木大拙先生に、とっておきの話として、少し得意気に話されたところ、鈴木先生は俯いてしまわれた。そして目頭に手を当てられて泣き始められた。そして暫くして、「いや、そんなはずはない、そんなはずはない、いくらキリスト教の人でも、老師の、この禾山和尚の慈悲愛がわからんはずはないんだ。」と言って泣かれた。西村先生は「老博士の涙」という題でこのエピソードを紹介されているのですが、この話の持っている大変な重みを改めて感じさせられたという訳です。

今この問題をとりあげたのは、禅あるいは仏教の靈性というものには、「己自究明」、自分自身を追求することが禅の中心にある。己自究明の専一、それだけに集中することこそが禅の生命だ、それが座禅ということだ。宗教者といわれる者は、元来救われない人間であるということ。いかに自分が救われない人間であるかということを心底まで自覚している、もう痛みの極みまで陥っていく人間だということです。この宗教者がなにか救ってやる側に立ってしまう。宗教者というのは、いつも指導者であり、模範であり、師であって、救う側に立ってしまって、自分自身がいかに救われがたき存在であるかの自覚に立っていないのが宗教者の恐ろしい一つの自己疎外であり、転倒である。それを徹底的に突き破るべきなのが宗教者であるのに、この人は修行、托鉢をするときに、それを外れて、一瞬なりとも荷車を押して、救う側に立とうとした。禾山禅師の警告は自分だけは救う側に立って行く人間の愚かさと傲慢というものを突き破れと言っている。

しかし、この解釈も、尚一つすっきりしない点が残る。キリスト教的に見れば、禾山和尚が率先して荷車を押せばいい、しかし、ここで考えなければならぬのは、下山せよといわれて、はいそうですかと下山してしまわず、門宿して粘り通した点だ。祖岳老師が、「実に実に良い話ではないか」といい、「先生も偉いが、修行者も偉い」と言っている。だから、ここでは禅の師がなされた指導の仕方を良いと言っていると同時に、又それとは正反対の行動に出て、非難され追放されるところ迄いきながら、尚頑張り通した弟子も偉いと言っている。

「俺は俺のために座禅しちよる」と喝破した山本玄峯老師の例でもわかるよ

うに、禅では、人類を救うだとか、何を救うとか言って、自分自身はどうなっているんだと問う訳です。こういう所に禅の問いかける問題がある。禅の人達が見る人間関係というのは、我々が常識で考えるのとは大きな違いを持っている。要するに、それから絶っていくとか、切り離された世界の中で、むしろ本当の人々に対する慈悲がなされるんだと言う。ですから禅では、お前が変れば世界が変わるんだと教えるわけです。徹底的な「個の靈性」から出発しているとも言える。仏教では、個(individuum)と人格(persona)の概念規定は私の知る限りは行われていないと思われます。

それに対して、キリスト教では三位一体の神を信じる。父、子、聖霊の三つのペルソナを有する唯一の神への信仰です。ペルソナとは本質的にindividualなものではなく、relatio(関係)なんだと言う。スコラ哲学では、人格の本質、自分自身を確立しているものは、ペルソナ(人格)だと言う。しかしそのペルソナの究みにおいて、三位一体のペルソナ(神)があって、人間とは違うが、根本的に関係概念がそのペルソナに含まれている。勿論、ペルソナのこのような深い考察はキリストの托身ということを通して、初めて知りえたことなのですが、この秘義を光の例で考えてみたい。光は無色透明なものですが、それをプリズムを通して見ると七色に別れる。しかしその七色よりも、この目に見えない光の方が大切ですし、もっと沢山の内容を持っていると思うのです。先の西村先生の分析は救われない人間としての自覚というところに話を持っていく。それも一つの色である。「個の靈性」、「実体の靈性」というところにポイントが置かれている。

それに対してキリスト教では、「関係の神学」というものが根本にあるのではないだろうか。その事は、神への愛と隣人愛という一番大きな掟がいわば同一視されていることから知られる。もっとも仏教にも無私(むし)の愛がないわけではなく、「ブールナの話」などは、その一例と言える。それにしても、キリストが、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。」(ヨハネ13, 34)と言われ、そこで初めて、古い掟でない、新しい掟と言われた。そして15章では、「人がその友のために自分の命を捨てること、これより大きな愛はない」(ヨハネ15, 13)と言い、繰り返して、「互に愛しあいなさい」(ヨハネ15, 17)と出てくる。そうすると、その相互愛と隣人愛との間に大変な違いが出てくるんじゃないか。隣人愛というのは、仏教でいう慈悲の概念に近く、徹底的に敵を愛し、自ら解脱して、人々を解脱させよ、悟りの境地に導けと教える。そこには一貫したものがあって、いわゆる「個」それを実体と呼ぶならば、「実体の神学」、先ず自分というものを確立せよ、自分に向えと教える。いわば、「内面の論理」というか、自己の救いに徹する厳しさがある。

それに対して、相互愛というのは、他者のためにのみ存在するキリストの姿に見ることができると思われる。十字架上のキリストに、「お前は人を救って

自分を救えないのか」(マルコ15, 31)というあざけりの言葉がむけられますけれども、まさしく人を救って、自分を救えなかった神と言えるんじゃないかなと思うんです。ですから、そこに「他者のためにのみ存在する人間」、それがキリスト者の靈性であったとしたら、今度は徹底的に関係の中に生き抜く人間だと思うんです。普通、関係とか実体とか別々のものに考えてますが、「関係即実体」というようなものになりきっていくところの一つの解決があるんじゃないか。一般に隣人愛といわれるものは実体の靈性の粋を出していないのではないか。ですから隣人愛の粋を破るのが相互愛なんだと。それは互いに愛しあいなさいというようなやさしいものではなくて、自分は愛されなければ救われない人間だ、愛することと愛されることがなければ救われない人間なんだと。ですから、「敵を愛しなさい」じゃなくて、敵を敵とも思わず、友として愛しなさいということ、その関係が純粋に確立されるような世界を造っていかれたのがキリストだと思うんです。

これはキリスト教の神学でも考え直す面を持っている。例えば、聖体の秘蹟について、以前は、聖変化の言葉は、「これは私の体である」ととなえられた。しかし今は、「これはあなたがたのために渡されるわたしの体である」と言われる。以前の式文は、「実体の神学」の視点が強調されている。しかし新しい式文では、「あなたがたのために渡される」とつけ加えられることによって、「関係」が強調された。いや、実体は関係そのものであるという訳です。「あなたがたのための私」、それがキリストだと言う。だから、あなたがたがいなかったならば、キリスト自身がその存在理由を失うと、そこ迄私達のためだけにしか存在できないような弱い人間となったのがキリストだと思う。こういうのが、キリストの関係秘義ではないかと思うわけです。

(文責 宮本 桂)



教育を考えなおす

■ 伊東 博

(横浜国立大学教授)

昭和41年～49年 日本カウンセリング協会理事長

昭和48年に「人間中心の教育を現実化する会」を設立し、全国各地で現場の教師・社会人のためのワークショップ研修会を開くなど、精力的に活躍されている。

著訳書：『ロジャーズ全集』『援助する教育』『人間中心の教育』等、多数。

— 社会適応を目標とする現代の学校教育を問いなおし、

自己実現への教育のあり方をさぐる —

私は、ここ10年余り人間中心の教育を実現するための努力を行なってきた。まず、現在の教育を考えなおすにあたり、教育目標の転換がなされなければならないと考えている。今までの日本の教育は「教科」中心の教育であり、「人間」中心の教育を旨としたものではなかったのである。後者の目指すところは、「教師」中心、「生徒」中心といった個々の問題でもなく、まさに総体としての「人間」中心なのである。そして、「教科」中心の教育と「人間」中心の教育の基本的な差異は教育の目標観の違いとしてあらわれる。すなわち、文部省が100年余り行なってきた教育の目標は「社会適応」であり、一方「人間」中心の教育の目標は「自己実現」である。この「自己実現」は学習指導要領の中で述べられているが、具体的には道徳の指導書において児童生徒の「自己実現をしたい気持ちを理解するように」と取りあげられているにすぎない。また、生徒指導の手びきにあっては、「社会化」の概念が強くおし出され、自己実現も社会的価値との関連においてなされると規定されている。しかし、自己実現とは時には反社会的な場合もありうるのである。

一方、学習指導要領が教育課程審議会から発表され、その基本方向として第1に人間性豊かな児童生徒の育成、第2にゆとりのある、しかも充実した学校生活、第3に国民として必要な基礎的・基本的内容、個性や能力に応じた教育があげられている。これらのことは注目すべきことである。これらの基本方向の実現を考えると、前述の教育目標の転換とともに学校と教育の人間化をしなければならない。

さらに、私の「人間」中心の教育の提案のもっともユニークな点は前述の主張とともに、教育課程の具体的提案にある。それについては、表のように「ニュー・カウンセリング」の5領域として整理している。



次に、「人間」中心の教育のための教育方法に触れることにする。まず、オープン・スペース・プランの実践や社会的リソースの活用として個人教育（チューター・ボランティア）がある。次に、選択科目を増やし自由にするのが考えられる。現在の日本の高等学校では生徒が選択するよりも教師が選択しているのが実情である。また、学習者自身の選択する科目の増加とともに、より実際の学習コースも豊富につくり、キャリアを作る教育も考えていくべきである。

最後に、学校制度の改善を考えると、外国にみられるようなオルタナティブ・スクールをつくり、選択できる特色ある学校経営を行なう必要がある。また、今ある学校の小規模化も大切な問題である。現在児童生徒数 3,000～4,000人の学校が出現しており、そこでの人間関係は稀薄化し、暴力行為も多くなっている。それらの改善のためにも、500人以下の小規模学校にする必要がある。建物自体が大きい場合、学校の中に2、3の学校をつくるといった Schools within a School システムが考えられる。

教育は時間がかかるけれども、今教育の改善にできることから一步でも踏み出さなければならないと私は考えている。

（文責 津村 俊充）

表 「ニュー・カウンセリング」（「人間中心の教育」の教育課程）の五領域（研究会の資料より）

領域	テーマ	学習内容	学習方法（実習）
I	感ずる (Sensing)	感覚の覚醒 (Sensory Awareness)	①基本的な演習 ②諸感覚の覚醒 ③ものの声をきく ④アリカ (Arica)
II	からだ動く (Moving)	からだの動き方 (Movement) (1)リズムカル (Rhythmical) (2)基本の動き (Fundamental) (立居振舞)(行・住・坐・臥) (Sitting・Standing Lying ・Walking)	⑤瞑想・ファンタジー・からだの動き方Ⅰ (MPM) ⑥からだの動き方Ⅱ・(1)基本姿勢 ⑦からだの動き方Ⅱ・(2)立居振舞 ⑧からだの動き方Ⅱ・(3)ヨーガ入門
III	自己を見る (Looking- Within)	自己の学習 (Self-Awareness)	⑨自己肯定度インベントリー (SEI) ⑩自己探究と自己表現 ⑪ファンタジーによる自己探究 ⑫自己発見の旅 ⑬強制選 択による自己理解 ⑭集団の意思決定と集団における役 割 (NASA) ⑮小・中学生のための自己理解ノート
IV	かかわる (Relating)	対人関係 (Interpersonal Relations)	⑯自己紹介 ⑰出会い ⑱二人組・四人組 ⑲コンフ ロンテーション ⑳信頼演習 ㉑対人関係へのウォーミン グ・アップ ㉒コトバの基礎演習 ㉓特殊な演習
V	あらわす (Expressing)	表出・表現 (Releasing & Expression)	㉔表出・表現のためのウォーミングアップ ㉕鏡になって 動く ㉖やってみる (Doing) ㉗なってみる (Being) ㉘感じてみる (Feeling) ㉙つくってみる (コントラクション)

からだ・ことば

■ 竹内 敏晴

(宮城教育大学教授)

教員養成の大学で「身体表現」の講座を受け持ち、自ら主宰する竹内演劇教室で「からだのレッスン」を行う。主な著書：『ことばが劈かれるとき』、『からだか語ることば』、『劇へーからだのバイエル』、『話すということ』他。

「からだか、単なる客体としての肉体でなく同時に人間存在としての主体であり、また人と人との関係において成り立つ現象であるとするならば、子どものからだを織り成すのは教師のからだでもあるのだ。そしてまた、もちろん親のからだでもある。」竹内教授は、ひとか「人間になってゆく」とはどのようなことなのだろうかと問い、ひとはさまざまな迷いや、あやまちに出合い、そのとき他の人との関係によって自らに気づき、苦しみを超えることによって成長する、と自答し、しかし、まさにこの人間になってゆく過程で「からだ」の問題がどれほどの大きさと重さを占めているのか、まだ親も教師もさだかには知っていない、と今日の教育の根源的な脱落点を痛烈に指摘して、その近著「からだか語ることば α+教師のための身ぶりとことば学」の冒頭の文としている。

「からだ・ことば」のテーマの下に、研究会は3つのセッションに分けられたが、それらは発展的に連続する一つの体験的実習の形式であった。以下、簡単にその幾つかを教師としての私個人の感想を含めながら紹介する。

並ぶ、触れる、融け合う

これら人間の最も基本的動作の実習を通して、身動きはこころの動きの現われであり、また、こえとことばも身動きの一部にすぎず、こころとからだとことばとは根源的に一つのものであることを体験する。今日、わたしたちが人間関係を持たない、作れないのは、こころとからだの分裂にある。

力を抜く

動くということの基本はまず「重さにからだをまかせろ」ことにある。そこから始めない動きは、力まかせで、硬直していて小さい。現代の管理社会の中で、ひとは上からの支配に適応し、あるいは抵抗し、緊張の連続、神経のすり減らしである。それだからこそ、力を抜き、からだの重さを感じ、深く息をつき、存在する始動を取りもどすことを今すぐ始めねばならない。

話しかけ

「数人が不規則に座り、数メートル後ろからもう一人が、そのうちの誰かを選んで話しかける」——今日の教育には、ただ音としての言葉を投げかけ、それを聞きわけ、意味だけわかればよい風潮がある。ほんとうに話しかける、声で相手にふれるという、この人間の基本的な行為の能力を、私たちは失いかけているのではないか。学ぼうとするものに向って語りかけ、相手と触れ、対話し、相手の心の内になにごとかを起こすことが、本来教えるということである。

通リゃんせ

「道を塞いでいる人と通ろうとしている人の問答の歌を合唱してみる」

ただ声を出しさえすれば、音は記号として組合わせられ、ことばを形成するのではない。ことばが生きて歌われるためには、内から発して多者に向う行動でなければならない。歌は生きた主体＝人間の「表現」、魂の噴出であり、単にきめられた型の、つまり客体化された音の動きの模写にすぎないなら、ことばも歌も、そこでは死んでいる。ひとつひとつの言葉と触れあい、その響きが私たちのからだところの深層から目ざめさせてくる動きに感応すること、それが、ひとを知る、理解する、ということである。そうでなければ、講義も、発問も、解説も、ほめたり、しかつたりすることも、単なる馬に念仏、きまりきったビジネスでしかなく、ましてや人間関係の相互理解などおこるはずがないのである。

竹内教授は、人間関係をもつとは、相手と共振するからだ、一緒に変化してゆけるからだに至ることだ、と述べている。今日の人間は、ほとんどが、受験戦争の原則「他人から遠ざかれ、閉してもって秘かに貯め込め、他人に手の内を見せるな、蹴落せ、よじ昇れ」で仕立て上げられて来たからだである。どうして、他者のからだまで共振することができるであろうか。このためのレッスンを次のようにまとめておられる。

- ひとにふれられないからだに気づく。
- 自らのからだのこわばりに気づく。
- からだをとほぐす。
- からだの内に動くものを感じる。
- 感じるままに動く。
- ものにふれる。
- ひとにふれる。
- 他者に向って働きかける。
- こえで働きかける。
- ことばで働きかける。
- からだ全体が深くいきいきと動く。

からだの力を抜き、ときほぐすことが出発点になるが、それは肉体の緊張だけでなく、内なる身がまえをとくことである。そして、今日の教師には、特に感じるままに動く、という訓練が必要である、と強調されている。

私はこの研究会の三回のセッションを通じて、竹内教授の、この身がまえのない、からだところへ語りかけるひたむきなことばに接することができ、教師としての自分のあり方を深く反省するとともに、あふれでる教授の笑顔を強く印象づけられたものである。

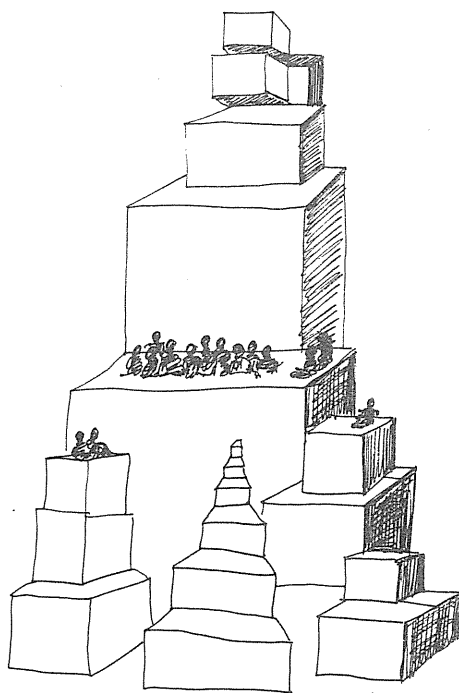
(文責 會澤 俊三)



■ 社会人研修／概要

“ねむりこけたままほうられている人が多すぎる”

ーサン・テグジュペリ



センターの重要な機能の1つである社会人向け公開講座は昭和52年のセンター発足時から開講されている。この講座はセンター発足以来、6年間ほぼ定期的に関開かれ、センター研究員には訓練をする側のより広い経験の場を提供し、社会人にはユニークな学びの場を提供して来た。この6年間の各開講講座の概略および参加者数とその内訳は別表の通りである。春秋と年2回の基礎研修講座は12回を重ね、週日の夕方6時15分より9時まで8回のコースであって、体験学習への導入を通じて自己理解と他者理解の基礎を学ぶのを目ざしている。大体同じ内容のプログラムであっても参加者が各回異っている事や、参加者が異なる視点をもって参加することにより、全く異なる体験が可能となるため繰り返し参加する受講者も少なくない。また、さまざまな利害関係にとらわれることなく人と人との接触が可能になる場がそこで提供されることから、新しい友人関係や仲間意識が芽ばえ、自主的研修グループに育っていく例もある。

基礎研修に続く専門研修として、さらに進んだ研修や各論的研修が考えられているが、スタッフの余力に限度があるため、現在では個人の自己理解を深める研修と、グループ成長を目ざす研修がそれぞれ1泊2日2回という形でおこなわれている。以前開講されたCLL(Community Language Learning)講座、カウンセリング講座、リーダーのためのキリスト教講座など、特定研修講座もスタッフや日程の都合がつけば再び開講したいと願っている。

■ 社会人研修／人間関係基礎研修講座

■ 人間関係基礎研修講座

・自分自身のことをもっとよく知りたい、自分の行なっているコミュニケーションのあり方を点検したい、グループのメンバーとしての自分の能力をみがきたい、など人間関係の学習の主要テーマを、特別に開発された実習を個人やグループになって行いながら、体験的に学習してゆきます。

この研修は、毎週一回ウィークデイの夜間(6:15～9:00)を用いて、8週間で一コースになるように計画されています。春・秋各一回開催しております。

〔参加資格〕 20才以上の健康な方(男女・学歴は問いません)

〔参加定員〕 40名

この講座は開設当初は「人間講座」と称していたが、第9回から「基礎研修」と改められ、これまで通算12回、参加者429名を数えた。

(例) 第10回 人間関係講座 基礎研修

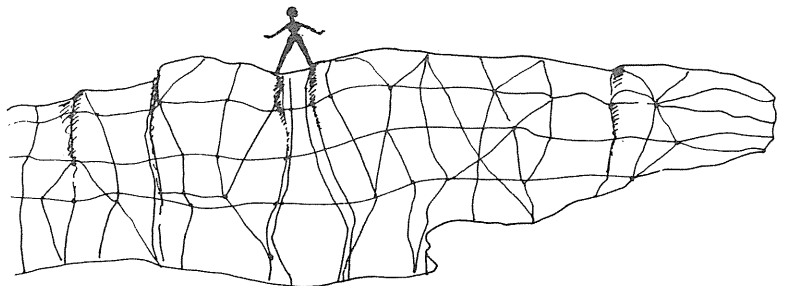
講座のねらい

今ここでのお互いの関係の中で

- ・自分がどのような動きをしているのか。
- ・他者がどのように動いているのか。
- ・相互にどのように影響し合っているのか。
- ・自分、他人がどのような価値感をもっているのか。
- ・どんな行動パターンがあるのか。
- ・グループの中にどのようなことが起っているのか。

などに気づき、

自分、他者、グループに適切な行動をとる。



9月24日		10月1日		10月8日		10月15日	
PM	受 付	PM	受 付	PM		PM	
6:15	開 会 この基礎研修の目指しているもの	6:15	導 入 今日の予定	6:15	導 入	6:15	講義 心の四つの窓 フィードバック
6:40	実習1 お互いに知り合うために	6:80	実習1 問題解決の実習	6:25	実習1 ノンヴァーバル コミュニケーション	7:00	休 憩
7:05	ねらいの説明			7:15	休 憩	7:15	実習 無言の集団作業 ・ふりかえり ・まとめ 今日の感想 自分について感じたこと
7:20	休 憩	7:55	休 憩	8:00	実習 たずね・こたえ 観察する		
7:30	実習2 講座への期待の共有化	8:10	実習2 「聴く」実習	8:40	小講義 対人コミュニケーションについて	9:00	
8:20	学習スタイルのイベントリー 小講義 学習方法について EIAH	9:00	終 了	9:00			
9:00	終 了						
10月22日		10月29日		11月5日		11月12日	
PM		PM		PM		PM	
6:15	導 入 ○グループプロセス について -スキット「思いやり」 コンテンツとプロセス について	6:15	導 入 フィードバックサークル についての講義	6:15	導 入	6:15	他人と話し合う 時 の 自 分 の 検 討
7:00	実習 POPOPO ーグループ討議 と観察ー 第1グループ	6:45	実習1 的あて (JICE資料)	6:80	実習 NASA 1. 個人決定 2. 集団決定 3. 結果の公表 4. ふりかえり	7:15	休 憩
8:00	休 憩	7:45	休 憩			7:80	ま と め
8:10	実習 第2グループ ふりかえり	8:00	実習2 フィードバックサークル (資料参照) ふりかえり	9:00	コンセンサスの実習	9:00	
9:00		9:00	ねらい 自分の動きに 気づく				

■ 社会人研修／人間関係専門研修講座

通称「継続研修」と呼ばれ、人間関係講座で基礎研修を終了した方や、既に体験学習による研修に参加したことのある方で、さらに学習を深めたい方々のための研修です。ウィークエンドに行なわれる一泊二日の集中的なプログラムで、二回で終了するように計画されています。

これまで9回の講座が開かれて、118名の参加者があった。

継続研修（A）－自己啓発－

特に自己理解を深めることや自己表現を試みることを通して自分の可能性を発見し、他者とのかかわりの中で自己成長してゆくのに必要な能力を養えるように援助します。

継続研修（B）－グループ成長－

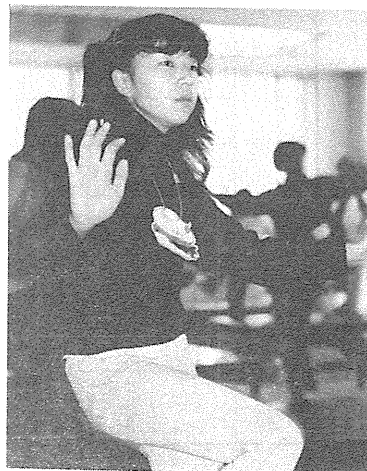
グループやチームのメンバーとしての自分や他者の影響関係に気づき、人間関係の改善や相互援助関係・信頼関係の形成に必要な能力を養えるように援助します。

（例） 人間関係講座－継続研修－（1983年度）

からだ自己成長 －自己成長への身体的アプローチ－

この講座のねらい

- ◆自己理解のための新しい手がかり（からだ）をつかむ
- ◆新しい自己表現・自己のあり方をこころみる
- ◆より創造的なかかわりあいをもつ
- ◆ストレスの有効な転換をさぐる



全 日 定 表

	7月9日(土)	7月10日(日)	7月23日(土)	7月24日(日)
7:00				
8:00		朝食(ベタニア)		朝食(ベタニア)
9:00				<ul style="list-style-type: none"> ○体をはぐすエクササイズ ○新しい名前をつける ○無言で自己紹介 ○目を閉じて手を触れ合う ○柔らかさ・強さ・温かさ(苦・楽・喜・悲・信頼・愛...) ○器楽に身をまかせて ○輪の中に立ち自分のからの感情のままに... ○Clay Modeling
10:00		<呼吸について> <ダイナミック メディテーション>		
11:00		(体育館)		
12:00				昼食(学食)
1:00		昼食(おにぎりをもってペアでルンルン!)		
2:00	<ul style="list-style-type: none"> ○オリエンテーション ○生活案内・ねらい・参加の仕方 ○映画「IN A BOX」 ○仮の名を付ける 	Drawing	<ul style="list-style-type: none"> ○新しい名前をつける ○ミニストレッチング・エクササイズ ○紙に身体の輪かくを描く ○緊張と弛緩(抑圧と解放) ○手をくんで押し合う ○私のだノイヤだノ ○ボクシングのようにエネルギーの交戦 ○手刃で切り合う・手やりでつき合う ○Music ○Relaxation 	<ul style="list-style-type: none"> ○Sacred Dance < Trip to the Beach > <自分のありたい姿へ>
3:00	<五感のめざめ> 実習「目かくし探索」			
4:00				
5:00				
6:00	夕食(学食) 無言で食べる		夕食(学食)	
7:00				
8:00	<自己の象徴としてのからだ> ・デモンストレーション ・緊張のエクササイズ		<ul style="list-style-type: none"> ○ミニ復式呼吸エクササイズ(夕日に向って) ○自然な体の音声を出す(中京TVに向って) ○(屋上) オームの響きの輪 ○マッサージ 	
9:00	・マッサージ			
10:00			お・た・の・し・み・会	

— 継続研修(B) — (1983年度)

“生き生きとしたグループライフの創造をめざして”

講座のねらい

1. グループが成長していく過程を体験する。
2. 他者との出会いを体験する。
3. グループの諸要素についての理解を深める。
4. グループのなかで自己の行動様式の理解と変革の試み。

1983年度 人間関係講座 継続研修(B)

人間関係研究センター
継続研修(B)
84. 2. 5

全 日 程 表

時間	1月21日(土)	1月22日(日)	時間	2月4日(土)	2月5日(日)
7:00			7:00		
8:00		朝 食	8:00		朝 食
9:00			9:00		
10:00		セッション 2	10:00		セッション 6
11:00			11:00		
12:00		P.M.R の記入	12:00		P.M.R の記入
		昼 食			昼 食
13:00			13:00		
14:00		セッション 4	14:00	メンバー集合 導入(先回のふりかえり)	リフレクション
15:00	受 付 導入(個人の期待 少し体を動かす)	P.M.R の記入	15:00		
16:00	ねらいの提示 諸生活の案内 グループビンゲ 休 憩	メンバーへの手紙	16:00	「12人の怒れる男」 VTR前半の放映 1回目 2回目 個人決定 グループ討議 VTR後半の放映	終了・解散
17:00	セッション 1	解 散	17:00		
18:00	P.M.R の記入		18:00		
19:00	夕 食		19:00	夕 食	
20:00	セッション 2		20:00	セッション 5	
21:00			21:00		
22:00	P.M.R の記入		22:00	P.M.R の記入	
23:00			23:00		

■ 社会人研修／人間関係特定研修講座

1. Community Language Learning 講座
2. カウンセリング講座
3. リーダーのためのキリスト教講座

1977 Community Language Learning 講座

講 師 パウロ・ラホルジ(南山短期大学助教授)

田 中 春 美 (南山大学教授)

参加者 14名

1977年11月4日～12月9日

1978 Community Language Learning 講座

講 師 パウロ・ラホルジ(南山短期大学助教授)

参加者 2名

1978年5月19日～7月7日

Purposes To Study

- English as Human Relations
- English as Teaching-Learning
- English Teaching Projects as
"Contracts"
- "Contracts" which consist of
Group Experience
Group Reflection
- Classroom and English Club Management
- The Teacher and Learner as Developing
Persons
- A New Way of Creating Community

Table of Contents

- 1) Friday, May 19, 1978
Orientation
Introduction to CLL
- 2) Friday, May 26, 1978
Self-Introduction
(Small Group Exercise)
- 3) Friday, June 2, 1978
Group Questions & Answers
(Small Group Exercise)

- 4) Friday, June 9, 1978
Statements & Reactions
(What is an English Conversation?)
- 5) Friday, June 16, 1978
Listening Practice
- 6) Friday, June 23, 1978
Relating Experiences
(A Public Speaking Exercise)
- 7) Friday, June 30, 1978
Pair Conversation
Large Group Conversation
- 8) Friday, June 7, 1978
General Reflection Period

1978年カウンセリング講座

講師 パウロ・ラホルジ (南山短期大学助教授)
平木典子 (立教大学カウンセラー)

参加者 15名

- 6月10日 ○カウンセリング・モデル, カウンセリング契約とその過程
- 6月24日 ○「聴く」実習
○カウンセリングの実習とその体験のふりかえり
- 7月1日 ○ロジャーズのカウンセリング理論
○カウンセリング実習
- 7月8日 ○カウンセリングのリードの量による技術 (F. P. ロビンソン)
○カウンセリング技能の実習のための手引き
○カウンセリングのケーススタディ, 応答練習
- 7月15日 ○PerlsとGlariaのカウンセリング理論
- 7月22日 ○まとめ

1979年カウンセリング講座

講師 澤田慶輔 (南山短期大学人間関係科教授)
福山清蔵 (立教大学学生相談所員)

参加者 15名

- 1. カウンセリングの理論 — 対人援助の理論と方法
- 2. カウンセリングの技術 — 関係のプロセスを追う
- 10月7日 ○お互いを知る。フィードバックを通じて自分のスタイルについてヒントを得る。
○コミュニケーションについてのチェックリストを使って, 他者・評価とつけあわせてみる。

- 10月7日 ○ “何のためのどんな援助か” —様々な援助についての交通整理—
 ○ カウンセリングとは何か —理論と技術—
- 10月13日 ○ 「聴く」の実習 シート1・2 —聴くとはどんなことか。留意点—
- 10月14日 ○ 「聴かない」の実習 ロール・プレイング（テープ聴取）
 ○ 「対決」の実習 —受容と対決，価値観の問題—
- 10月20日 ○ 「ロール・プレイング」（内容と過程） —プロセスで何が起っているか—
- 10月21日 ○ 他人と話し合いをするときの自分の検討
 ○ セルフ・スーパービジョンの方法

1981年リーダーのための基督教講座

講 師 G.グリフィン （聖コロンバン会司察，宣教・司牧委員会員）

吉 田 礼 子 （宣教司牧委員会スタッフ）

参加者 17名

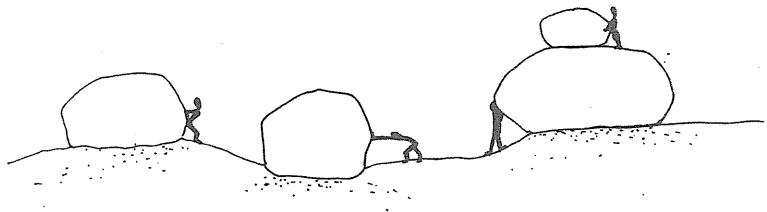
1. 基督教教育活動のリーダーである受講者自身がキリストのよろこびのニュース（福音）に生きること。
2. 現代に則した方法でキリストのメッセージを伝えたいという要望に応えること。

8月24日～27日

第Ⅰステージ …… 自分との出会い

第Ⅱステージ …… キリストとの出会い

第Ⅲステージ …… キリストの共同体との出会い



主よ，あなたのみ手の中にいるわたしを，順応性に富んだ者として下さい。

できごとをとおして，

兄弟である人びとの真の要求に応えるため，

あなたに導かれて進み，

創造のみ業の中で

°あなたが期待されるわたしの場と，わたしが果たすべき役割とを

見いだすことができますように。

—ミシェル・クオスト

■ 社会人研修／参加者統計

社会人研修講座受講者数

人間関係研究センター

講座名	期 間	時 間	曜 日	参加者数	性 別		居 住 地		職 業										年 令				
					男	女	市 内	市 外	公務員	団体職員	会社員	自営業	医療関係	教育関係	教会関係	主婦	学 生	その他	20 29才	30 39才	40 49才	50 才以上	
人間関係基礎研修講座	入門講座(1)	S52 10/13~ 12/8	18:00 20:30	木	48	25	23	31	17	4	7	18	4	6	2	4	3	0	0	15	13	16	4
	入門講座(2)	S53 5/20~ 7/8	14:00 17:00	土	42	10	32	32	10	0	3	8	0	2	9	2	10	8	0	15	13	11	3
	入門講座(3)	S53 10/12~ 12/7	18:15 20:45	木	45	12	33	16	29	6	0	12	4	3	3	2	4	10	1	19	10	10	6
	入門講座(4)	S54 5/10~ 6/28	18:15 21:00	木	43	13	30	34	9	2	1	14	0	1	8	10	4	2	1	26	13	2	2
	入門講座(5)	S54 10/4~ 11/29	18:15 21:00	木	38	5	33	27	11	0	1	6	2	3	13	3	1	6	3	20	11	3	4
	入門講座(6)	S55 5/8~ 6/28	18:15 21:00	木	30	7	23	24	6	3	0	5	0	3	5	1	4	6	3	14	10	3	3
	入門講座(7)	S56 4/30~ 6/18	18:15 21:00	木	26	9	17	18	8	1	2	9	1	2	3	0	4	3	1	14	5	3	4
	入門講座(8)	S56 9/24~ 11/12	〃	〃	25	14	11	20	5	1	2	12	0	1	2	0	2	3	2	15	7	3	0
	基礎研修9	S57 5/8~ 6/24	〃	〃	28	11	17	21	5	2	0	5	2	1	2	4	5	5	2	12	6	8	2
	基礎研修10	S57 9/24~ 11/12	〃	金	34	14	20	25	9	2	2	8	1	2	4	1	6	5	3	14	13	7	0
	基礎研修11	S58 5/6~ 6/24	〃	〃	38	13	25	23	15	2	0	12	3	8	2	1	3	4	3	25	7	3	3
	基礎研修12	S58 9/30~ 11/25	〃	〃	32	10	22	15	17	4	2	9	4	3	2	0	2	5	1	25	6	0	1
	計				429	143	286	288	141	27	20	118	21	35	55	28	48	57	20	214	114	69	32
人間関係専門研修講座	人間関係講座Ⅱ	S53 10/28~ 11/25	13:00 17:00	土	24	7	17	22	2	2	3	2	0	4	3	1	3	6	0	7	9	7	1
	人間関係講座Ⅰ	S54 10/13,14 20,21	14:00 16:00	1泊2日 土・日	14	6	8	9	5	2	0	3	0	3	3	0	0	2	1	6	7	1	0
	人間関係講座Ⅰ	S55 10/4,5 11,12	14:00 16:00	1泊2日 土・日	8	3	5	6	2	2	1	0	0	2	2	0	0	1	0	2	3	2	1
	人間関係講座Ⅱ	S55 10/18,19 25,26	14:00 16:00	1泊2日 土・日	8	2	6	7	1	0	2	1	0	2	0	0	3	0	4	2	1	1	1
	人間関係講座Ⅰ	S56 6/13,14 20,21	14:00 16:00	1泊2日 土・日	16	3	13	12	4	1	2	1	0	2	0	0	3	5	2	8	4	2	2
	人間関係講座Ⅱ	S56 11/7,8 14,15	〃	〃	7	1	6	6	1	1	1	2	0	1	1	0	0	1	0	2	2	3	0
	人間関係講座A	S57 6/12,13 19,20	〃	〃	8	5	3	7	1	2	1	0	0	1	1	0	0	1	2	1	2	2	3
	人間関係講座A	S58 7/9,10 23,24	〃	〃	20	5	15	14	6	1	0	7	2	8	1	0	1	0	0	11	6	3	0
	人間関係講座B	S59 1/2,1,22 4,5	〃	〃	13	1	12	5	8	0	1	4	0	3	5	0	0	0	0	7	2	4	0
計				118	33	85	88	30	11	11	20	2	26	16	1	7	19	5	48	37	25	8	
人間関係特定研修講座	C L L 講座 1	S52 11/4~ 12/9	16:30 18:00	金	14	6	8	7	7	0	0	1	1	0	12	0	0	0	0	2	8	2	2
	C L L 講座 2	S53 5/19~ 7/7	17:00 18:00	金	2	0	2	2	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1	1	0
	計				16	6	10	9	7	0	0	1	1	0	14	0	0	0	0	2	9	3	2
	カウンセリング	S53 6/10~ 7/22	17:30 20:00	土	15	2	13	7	8	0	2	1	0	1	10	1	0	0	0	5	5	3	2
	カウンセリング	S54 10/6,7,13 14,21,22	14:00 17:00	土~ 日	15	1	14	15	0	0	1	2	0	1	5	6	0	0	0	3	1	4	7
計				30	3	27	22	8	0	3	3	0	2	15	7	0	0	0	8	6	7	9	
リーダーのための キリスト教講座	S56 8/24~ 27	9:00 21:00	月~ 木	17	4	13	4	13	0	0	0	0	0	0	17	0	0	0	1	2	9	5	
総 計				610	189	421	411	199	38	34	142	24	63	100	53	55	76	25	273	168	113	56	

■ 社会人研修／1984年度人間関係研究センター事業予定

南山短期大学
人間関係研究センター

The Center for the Study of Human
Relations Nanzan Junior College.

個性ある生き方と人間性豊かな社会をつくり出すために

私たちは一人ひとり豊かな人間性と独自の個性とを持ったかけがいのない存在です。ところが現代社会の中で私たちは、役割の中に埋没し、互いに心を閉ざし、かかわり合うことをおそれ、人間をあたかも物の如くに扱い、自分も取るに足らぬ者としか感じられなくなってはいないでしょうか。

人間関係の教育は、対話を通して自分の価値観や人間性をみがき、他者への思いやりと感受性を豊かに養い、ひとりひとりが活かされるグループや共同体を形成し、人間疎外の社会を愛と信頼関係のあふれる人間尊重の社会へと変革することと、それらの担い手を育てることに取り組みます。

いまこそ本当に人間関係の教育が必要とされているのです。

一般研修

人間関係講座－基礎研修－

自分自身のことをもっとよく知りたい、自分の行なっているコミュニケーションのあり方を点検したい、グループのメンバーとしての自分の能力をみがきたい、など人間関係の学習の主要テーマを、特別に開発された実習を個人やグループになって行いながら、体験的に学習してゆきます。この研修は、毎週一回ウィークデイの夜間(6:15～9:00)を用いて、8週間で一コースになるように計画されています。春・秋各一回開催しております。

第13回 59年5月11日(金)～7月6日(金) 但し、6月29日を除く

第14回 59年9月28日(金)～11月30日(金) 但し、10月19日と11月23日を除く

継続研修

基礎研修を終了した方や、既に体験学習による研修に参加したことのある方で、さらに学習を深めたい方々のための研修です。ウィークエンドに行なわれる一泊二日の集中的なプログラムで、二回で終了するように計画されています。日程その他はセンターまでお問い合わせ下さい。

継続研修(A)－自己啓発－

特に自己理解を深めることや自己表現を試みることを通して自分の可能性を発見し、他者とのかわりの中で自己成長してゆくのに必要な能力を養えるように援助します。

59年7月14日(土)～15日(日)及び7月21日(土)～22日(日)

継続研修(B)－グループ成長－

グループやチームのメンバーとしての自分や他者の影響関係に気づき、人間関係の改善や相互援助関係・信頼関係の形成に必要な能力を養えるように援助します。

60年1月19日(土)～20日(日)及び1月26日(土)～27日(日)

〔参加資格〕 20才以上の健康な方(男女・学歴は問いません)

〔参加定員〕 40名

〔参加費〕 12,000円

〒466 名古屋市昭和区隼人町19番地 TEL (052)832-6211

V 南山短期大学人間関係研究センター規程

第1条 本学に南山短期大学人間関係研究センター（The Center for the Study of Human Relations of Nanzan Junior College）（以下「センター」という）をおく。

第2条 センターはキリスト教的人間観に立って広く学際的・行動科学的に人間・人間関係の研究および研修を行うことを目的とする。

第3条 前条の目的を達成するために、次の各号の事業を行う。

1. 人間・人間関係に関する研究と教育の推進
2. センターと目的を共通にする学外研究機関との協力
3. 地域社会における開かれた大学としての諸機能を果たすために研究会・研修会等の開催および個別的相談・指導・援助等
4. 研究成果の刊行ならびに文献・資料の蒐集と一般への公開
5. その他センターの目的達成のために必要と認める事業

第4条 センターに研究員を置き、そのうち1名を主任とする。

② 研究員および主任は学長が委嘱する。

第5条 主任はセンターの事業を掌理し、センターを代表する。

第6条 センターは必要に応じて顧問・相談員・講師をおくことができる。

第7条 センターはその目的にそって研修しようとするものを研修生として受け入れ指導・援助を行う。

研修生についての規程は別に定める。

第8条 センターに事務職員をおく。事務職員は主任の指示をうけてセンターの事務を担当する。

付 則

本規程は昭和52年9月30日より実施する。

Ⅳ 南山短期大学人間関係研究センター研究員

(1977年9月～1980年3月)

主任 リチャード・メリット

大庭征露	吉川房枝	新納嘉夫	成瀬小四郎	伊藤雅子
星野欣生	パウロ・ラホルジ		會澤俊三	宮本 桂
山口真人	天野正子			

(1980年4月～1982年3月)

主任 リチャード・メリット

大庭征露	伊藤雅子	新納嘉夫	佐藤一夫	星野欣生
會澤俊三	藤岡俊子	中野 清	大森正樹	津村俊充
山口真人				

(1982年4月～1984年3月)

主任 中堀仁四郎

リチャード・メリット		佐藤一夫	伊藤雅子	星野欣生
會澤俊三	宮本 桂	大森正樹	山口真人	藤岡俊子
木村晴子	桜井 厚	中野 清	津村俊充	

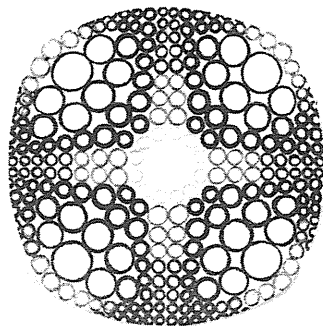
■ 編集後記

南山短期大学人間関係科は昭和48年に短期大学で他に類似を見ない全く新しい科として設立された。既設の人間関係学科とは異なり、単なる諸専攻の並置ではなく、諸々の個別的経験科学からの人間関係へのアプローチを水平的に統合するばかりでなく、垂直的に、哲学的、宗教的な確固たる人間観の深い基礎をもつ、いわば未だ確立されていない「人間関係学」ともいうべきものをめざすものである。学習の方法としては体験学習に重点をおいている。今年第10期生を世に送り出し、定員100名に対し入学志願者1,200余名の多きを数え、一応、人間関係科の創設期を全うした感慨である。

人間関係研究センターは、この南山短期大学での人間関係教育にたづさわる教員一同の、熱心な人間関係教育における理論と実践との全き統合を求める研究意欲と開かれた大学の使命感から自ずと生れてたものであった。「存在の現実から遊離した理論は空しく、現象や経験だけに頼った実践や技能は確固たる人生観、人間観の基礎を欠けば脱線する危険がある」といわれる如く、南山短期大学人間関係研究センターは、昭和52年の設立以来、人間関係科教員の全員が研究員となり、学生と社会人の教育実践にたえず裏うちされた研究を進めてきた。この「人間関係」誌は、人間関係教育における理論と実践との全き統合を探究して行くものと期待したい。

本号では、多くの人間関係教育の研究者と実践者の関心を集めているTグループ論を特集した。毎年100名余の女子大学生を集中的にトレーニングし、1,000余名の大学生Tグループ実践をもつ教育機関は、日本はもとより、Tグループ発生の米国でも類のない事例である。特に日本人の女子大学生レベルでのTグループ論の、今後の研究実践に多くの重要な意味合いを含んでいるものと考えられる。また、わが国に於けるTグループのあり方を伺うためにも、興味あるものと考えられるため、特にとりあげた。

(會澤俊三 記)



人間関係 創刊号

1984年3月17日 発行

編集者 會 澤 俊 三
津 村 俊 充
中 堀 仁四郎
星 野 欣 生

発行所 南山短期大学人間関係研究センター
〒466 名古屋市昭和区隼人町19番地
(052)832-6211・6214